

チェレンコフ ブルーの月

小山紗都子 著

放射能事故で

人生を変えられながらも気高く生きる「私」が会った、
大資産家老婦人「タエコさん」。その屋敷には彼女の
資産を狙う介護ヘルパーの若者たちが
出入りしていた……。

チェレンコフ ブルーの月

小山紗都子 著

セルバ出版

著者略歴

小山紗都子（こやま さとこ）

1960年生まれ。共立女子大英文科卒。埼玉県在住。生母による虐待・性的被害・親の離婚・いじめ・障害者の妹・未亡人・交通事故・リストラなど多数の人生経験をもつ、自称『社会派主婦作家』。

2009年、小説『主婦と若い殺人者』で小説デビュー。2011年には『森と鋼鉄のはざままで』（日本図書館協会選定図書）（いずれも日本地域社会研究所刊）、『サバイバー』を、2012年には『私だけのピアノマン』（いずれもセルバ出版刊）を刊行。

小山紗都子の小説ブログ：<http://ameblo.jp/ksatoko60/>

書籍コーディネイト：小山睦男

チェレンコフブルーの月

2014年1月21日 初版発行

著 者 小山紗都子 ©Satoko Koyama

発行人 森 忠順

発行所 株式会社 セルバ出版

〒113-0034

東京都文京区湯島1丁目12番6号 高関ビル5B

☎ 03 (5812) 1178 FAX 03 (5812) 1188

<http://www.seluba.co.jp/>

発 売 株式会社 創英社／三省堂書店

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1丁目1番地

☎ 03 (3291) 2295 FAX 03 (3292) 7687

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

-
- 乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。著作権法により無断転載、複製は禁止されています。
 - 本書の内容に関する質問はFAXでお願いします。
-

Printed in JAPAN

ISBN978-4-86367-143-0

チェレンコフ ブルーの月

小山紗都子 著

セルバ出版

小学生のころに読んだ漫画で、女の子が部屋のカーテンは断然ピンクだと主張すると、年上の男の子が「いやらしい」と批判し、ある夜、青いカーテンをつり下げた自分の部屋に彼女を誘うという場面があった。

そしてあかりを消したその部屋で、彼はギターを爪弾きながらこういうのだ。

（ほら、青いカーテンもいいだろ？ 月の光がきれいに見える）

私はそのシーンとせりふが忘れられなくて、自分だけの部屋を持ったら窓には青い色の、遮光性のないカーテンを下げようとずっと決めていた。

部屋に招いてギターを爪弾いてくれる彼氏の存在は、とりあえず抜きにして。

そして、ひとり暮らしの今。１ＤＫの賃貸アパートの二階、南東向きの部屋に住んでいる私は、深みのあるマリンブルーのカーテンを手に入れた。けれど、ここに住んで十年。私はいまだに青く染まった月の光を、部屋にいて拝んだことがない。

南東向きの部屋なので、満月はかなり高いところにのぼってしまふ。そのため、光がうまくあいに部屋に差し込まないのかもしれない。空気の澄んだ月夜にはバルコニーの手すりの影がくつきりと床に移っているので、光の量は申し分ないのだろうけれど。

月の光が入る時間帯に、私がほとんど部屋にいないというのも、原因のひとつかもしれない。というか、こっちのほうが主な原因だろう。平日は仕事、休日は外食。三十七歳にして独身の私は夜の仕事、学習塾の講師および経営者。駅前にあるビルの一室を借りて、夕方は小学生を、夜間は中

学生をたったひとりで指導している。

東京にある大学を卒業後、ひとり娘である私は田舎の親の要請に負けて、当時の恋人と泣く泣く遠距離恋愛を続ける決意をして帰郷し、そこで地元の学習塾に就職した。

恋人とはひそかに将来を誓い合った仲だったけれど、田舎にある工場でおきた大事故のせいで勤めていた塾が閉鎖され、この際結婚して東京で生きようとした私を待っていたのは、恋人の突然の心変わりだった。

悲しみよりも怒りで傷ついた私は、もはや田舎で生きる気持ちにはなれず、工場からもらった事故の見舞金と退職金を元手に、コネも実績も知名度もないまま、今住んでいる町でほそぼそと塾を始めた。

あれだけ私の将来にやかましかった親だが、都会でともかくまっとうな仕事で暮らせている私に、今は何もいわない。

私が田舎に帰らずに東京で暮らしていたら、事故にも見舞われず恋人と別れることもなく、順風満帆の人生を送っていたはずだ。親が私に何もいえないのは、田舎に呼び寄せたのが自分たちだったという負い目があるのだろう。

私は、結婚したいとも結婚したくないとも考えていない。一生独身で通す宣言をして、ひとり娘の人生を狂わせた後ろめたさにさいなまれている田舎の両親に、これ以上精神的負担をかけたいとは思わないから。

それでも元気いっぱいの子供たちや私を頼りにしてくれる親たちが相手のこの仕事は、独身であることのさびしさや不安を忘れさせてくれる。

何しろ私の顧客は、体力知力とも成長の盛りにある、夢と希望と前向きな志をたつぷりと背負った、子供たちである。平日の夕方から夜にかけての時間を、にぎやかな少年少女たちと過ごしそのパワーをもらっている。さびしいはずがない。

自分で子供を生まなくたって、毎年毎年途切れることなく大勢の個性豊かな子供たちが私の前に現れる。

子供を生むのも大切な仕事かもしれないが、育てるのはもっと大切な仕事だ。

この仕事を始めて五年ほどは、結婚もできず子供も生めない私にとって、その信念は半ば言い訳のようなものだったけれど、今は心から、人を育てることは重要だと思っている。

結婚できないのではなく、仕事が大事だから結婚をしないのだ、子供を生まなくたって十分に国家のお役には立てている、と。

だから私は、経済的、精神的に、この独身生活状態に大満足しているというわけである。

十五年間この仕事にどっぷり浸り、うるさい上司も面倒な同僚もない満たされた環境は、人恋しさというものをどんどん忘れさせていった。さらにこういう仕事をしていると、途中でやめるという踏ん切りがなかなかつかない。

この子たちを卒業させてからかと思いがちでも、新しいクラスを始めると、彼らが卒業するころに

は次の世代に私の熱意が取り付いていて、結局は塾をたたむという決意は先延ばしになっていく。

結婚に食指が動かないのは出会いがないからだともいえるのだろうけれど。なにせかわりがあるのは小中学生とその親。不倫文化に興味のない私にとって、ファミリーというとりでを持つ人間は恋愛の対象ではない。

自分が自由な独り身であることをひしひしと感じるのが、休日のファミリーストランの店内だ。

ふだんが夜遅い仕事をしているので、塾の仕事の後に立ち寄れる飲食店といったら、飲み屋か二十四時間営業のファミレスしかない。ひとりで飲み屋に入る気はないので、仕方なくファミレス、という選択になる。

平日の深夜は単独の客も多く、みんなスマホや本を相手に下を向いて黙っているのだが、休日の夕食時はほとんどが家族連れで、いつも活字中毒のように本を読みながら食事をする独身女性の姿というのはいくらも目立つ、ような気がするのである。

「そこで、誰かいい人を見つければいいじゃない？ 都会にはいくらでもいるでしょう、独身の男の人なんて」

正月早々、私立高校を受験する生徒が補習を希望したために帰省ができない私が、年賀の挨拶をかねて母に電話を入れたら、結局はそっちへ話が向かってしまった。

ファミレスで食べてるから雑煮なんて作らないわよ、なんていう話は冗談でもするものではない。

「あなたは結局結婚する気がないでしょ？ その気があれば、結婚相談所でも今はやりのコンパ

にでも出かければいいじゃない？」

「みつともないわよ。結婚ていうのは好きになった人と一緒になるための手段であつて、結婚そのものを前提にして男を捜すなんて本末転倒だと思ふんですけど」

「でも出会いがないような暮らしをしているんだから、好きになるも何もないでしょう」

相変わらず口達者な母親である。世間にはひとり娘を手放すと急に老け込む年寄りもいるらしいが、私の母親は別格だ。心配がなくてありがたいことだといえばそのとおりだけれど。

「奥さんを亡くして再婚したがっている父親でもいいんじゃないんだけどね」

「いないの？」

声が真剣だ。そうやって一方的に乗り気になるようなオメデタイ話ではないだろうが。

「いない。それに私、毎日若い子ばかり相手にしてるから年上の男って魅力感じないのよね。どんなに豪華な料理でも、おなかがいっぱいだったら食べられないのと同じで、完成された大人には興味がわかないのよ。悲しいことにね。でも、お金を稼ぎながら若さと元気をもらえて健康でいられるのよ。こんなにいい仕事ってないと思うわ」

「そんなこといったって、女の子がひとりでいつまでもそんな仕事を続けられるってわけでもないでしょ。さびしいわよ。自分が動けなくなったときのこと考えると」

「お言葉ですが」

私は、里帰りを諦めざるを得なかった原因を作った受験生たちに感謝する。新年早々顔を見るた

びにこんな愚痴を聞かされるなんて、精神衛生上最悪だ。

「私がずっとこっちで働いててお父さんが死んだら、お母さんだってその家でひとり暮らしなのよ。お母さんのほうが先にそうなる可能性は高いでしょうね。自分のことを心配したら？ 施設に入るか、もしも荷物整理してこっちへ来るっていうんなら、二部屋のアパートを借りてあげるし」

「また、そういうことをいう！」

母は、あからさまに不機嫌な声を出した。私が中学生のころから、母は生意気な娘の主張が本質を突いているがゆえに反論することができないと悟ると、いつも同じせりふを口にして会話を打ち切ってきた。

私は母の仏頂面が好きではないので、その一言が出たら黙ることにしている。しかし残念なことに、口達者なのは遺伝子のなせる業であるらしい。

「はいはい。結婚を諦めるわけではないって、何度もいつてるでしょう？ いい人がいたら何歳になっても結婚はしますよ。それまでふたりとも、元気で長生きしてちょうだい」

母をなだめるために、私も毎回到ようなせりふでこの不毛の対話を打ち切るのである。

私を信頼して通ってくれる教え子たちの成長を見守り、羽ばたいていく姿を見送るこの仕事を与えてくれる、使命感と満足感。それを上回るほど大きな何かを、見知らぬ人間との新しい家庭生活の中に見つけることに、何の意味があるのだろうか。

塾という、若者が相手の仕事についていなかったら、私はさっさと踏ん切りをつけて新たな恋で

もして、家庭を作ることと自己実現を図ろうとしたのだろうか。

そしてその選択は正しかったと、胸を張っていえるような人生を送ったのだろうか。

まったく予想もつかない。私は子供を生まないと決めている。生みたくないというわけでもないけれど、これはもう運命（さだめ）だと思っている。怒りと悲しみと絶望の果てに落ち着いた、生きるためのよりどころでありひそかな復讐でもある。

「一度お母さんも遊びにきてよ。それこそ元氣なうちにさ。おしゃれな喫茶店とか静かなレストランとか、ないんですよ、そっちには。せいぜい親子連れが床を汚して帰っていくようなバーガーショップとか、汗臭い労働者が愛用しているような食堂とか、そんなものしか」

「確かにね。ほんとに何もないのよね」

大都会で生まれ育ち、父の転勤で山の中の田舎に引っ越して家を建てた母は、いつもその田舎の垢抜けない低レベルの文化にうんざりしていた。

地元にあるショッピングモール以外の場所では、絶対に買い物をしない。一ヶ月に一度は近所の転勤族の奥様たちと、電車で一時間かかる町へ出かけて息抜きをしてくる。

そこで、紅茶ではなくカタカナのティーを飲み、音楽の流れるレストランで食事をし、いつ着るのといいたくなるようなスーツを買って、自分はまだ都会の暮らしを忘れていないという姿勢を保とうとしている。

そんな母だから、私が都会の暮らしぶりのあれこれを披露すると、うらやましさを隠し切れずに

おとなしくなるのだった。

いや、私の田舎には立派なものがそろっている。ホールもプールも研究施設も。足りないのは、それら洗練された文化施設を使いこなせる住民たちだけだった。

限らない未来を有する子供たちとの時間があるかと思えば、想像を絶するほどの過去を背負っている老人との出会いもある。

まだ静かな新年の雰囲気が漂う、うらかな日の午後。

私は、午前中の補習を終えて、自転車でアパートに向かう下り坂にさしかかった。

アパートは坂道を下りきった、一級河川の支流沿いにある。だからどこへ出かけるにも、いつもこの坂道を登らなければならない。

周辺にアパートやマンションが建設されるまで、この坂道はがけになっていて、子供たちがサンドスキーを楽しんでいたらしい。そのため坂道はかなり急なもので、運動神経に自信のない私は、いつも自転車を下りて慎重に坂を下っていた。

坂の途中にある老人向けの施設に来るお年寄りのために、道には車止めをかねた手すりが設置されている、それほどの勾配だ。

その急な坂の途中だった。

ひとりの老婦人が腰をかがめて何かを拾っている。ただその様子がひどく難儀そうだったので、

私は自転車を道路の隅に立てかけて、「どうかなさいましたか？」と声をかけたのである。

老人向け施設に通っている老人なのだろうか。身なりはとてもいい。よくみかけるスポーツウェアにダウンジャケット、毛糸の帽子にデイバックといういでたちではなく、ワインカラーのアンゴラの帽子にグレーっぽいツイードのロングコート、黒皮のショートブーツという上品な姿だ。

「ええ、紙袋が破れてしまつてねえ」

私の突然の声かけにも別に驚く様子もなく、老婦人は顔を上げゆつたりとした口調で答えた。見ると足元に、大きなみかんらしき果物が、五つか六つ転がり落ちてゐる。

私は彼女のそばにかけより、まだ道に転がり落ちたままのみかんを拾い上げた。

「ああ、悪いですねえ。ご親切にありがとうございます」

私を見つめる老婦人の穏やかな表情には、小春日和ののどかな日差しがとてもよくにあう。

「いいえ」

私は笑いながら、老婦人の手に果物を渡そうとしたが、彼女の両手は破れてしまった紙袋とその中身を抱えることではいっぱいようだ。

「よかったら、私の自転車のかごにお入れしましょうか？ お宅までお送りしますよ」

私は、得意の営業笑いを思い切り浮かべてそういった。たぶん、この老婦人が歩いて帰る距離など、たいしたものではないだろうと思つたのである。

「そうですか？ そうしていただけると、本当に助かります」

丁寧だけれど意外にしつかりとした声で、老婦人はそういつて頭を下げる。

私はいったん自転車に戻ると、手の中にあつた立派なみかんを前かごの中に収めて、再び彼女のところに自転車を押して戻ってきた。そして老婦人の腕から、みかんが入った紙袋を受け取ると、同じように前かごの中に入れた。

「ありがとうございます」

「いいえ、ひまですから」

私は自転車を押しながら、老婦人の歩く早さに合わせてゆつくりと坂道を登り始めた。

「お近くなんですか？」

「ええ、駅前通りに面した家ですからね」

駅前通りといっても、確かに直線距離では近いけれど、それは南北一キロにわたって伸びているものだから、遠いのか近いのか予測がつかない。そんな私の疑問に感づいたように、老婦人は付け加えた。

「あのコマツヤさんのおとなりに、白い塀のある家がありますでしょう？ あそこですよ」

「え？ あの庭園みたいなお屋敷ですか？」

「お屋敷というほどのものではないですけどね」

謙遜を口にしながらも、まんざらではないという面持ちで老婦人は微笑んだ。

まちがいなくお屋敷である。初めてそのお宅を目にしたとき、私は植物園か何かと勘ちがいの

のだから。

白い塀の中は緑が豊かで、立派な石造りの門柱は、とてもそこが個人の家だとは思えないほど堂々と目立つものだ。

海外のお城にあるような唐草模様の施された鉄製の門扉は、いつ見ても、どうぞご自由に中をご覧くださいといわんばかりに開け放たれていたのも、自然と目はその奥へといざなわれる。

門から家の玄関までは石畳のような小道が続いていて、その道の両側には四季折々の植物が彩りよく植えられており、ガーデンングというのはこういうものをいうのだろうかと思し見とれるほど、美しく手入れがなされていた。

小道が向かった先にある建物は、洋館のようなつくりの白い壁にかこまれたおしゃれなもの。縦に長いガラス窓には、どれにもレースのカーテンがかかっているのが見えた。玄関のドアは、重厚そうなダークブラウンの木製で、それまで雑誌でしか見たことのなかった、ライオンが鉄のわっかをくわえたようなノッカーがついている。

そんな大屋敷のご婦人が、歩いて老人センターに通っているのだろうか。家の人が送迎をしてくれないのだろうか。あれこれ疑問がわいてきて、私は幼い子供のように次々に質問を始めた。

「老人センターにいらしたのですか？」

「ええ。週に一度か二度ほど、遊ばせていただいているの」

「いつも歩きで？」

「そうよ。健康のために」

「ご家族の方は送ってくだらないんですか？」

「私、ひとり暮らしなのよ」

「え、そうなんですか？」

あの広いお屋敷に、この小柄な老婦人が、たったひとりで住んでいるのか？

うらやましいという気持ちはにわかに消し飛んで、なんとさびしい境遇だろうかという思いが、私の胸の中に広がっていく。

「そうなの。三年前に主人を亡くして、それからひとりなのよ」

「お子様とかはもう独立なさって？」

「子供はいないの。できなかったのよ。だから自分でがんばるしかないの」

「おさびしいでしょうね」

おひとりさまの自分が「さびしい」と決め付けるのはおかしいだろうか、いや、長年連れ添った伴侶を失ったのだから、逆にさびしさは大きいだろうとか、あれこれ思い巡らせながら、私は老婦人の返事を待った。

「それでね、家にばかりいては身体によくないと思って、気が向いたときだけセンターに通っているんですよ」

「じゃあ、何もかもご自分でなさっているんですか？」